

新人賞には気をつけろ

毎年4月になると、しがく式を学んだ多くの学生が社会に巣立っていきまします。新人社員代表スピーチや新人賞を獲得する先輩も多いため、自分たちも先輩の後に続けたいという学生さんも多いようです。若くして活躍したい、会社に貢献したいと思う気持ちは素晴らしいと思いますが、良いことばかりではありません。今回は華々しい成果の裏に潜む落とし穴について触れたいと思います。

大 学生の就活支援に携わり約17年が経ちました。これまで全国で約6万4千名の学生を社会に送り出してきましたが、就職活動を終えた後も学び続け、大学卒業まで実力をつけて社会人になった方々の活躍は目覚ましいものがあります。社員数1000名を超える大企業で新人賞を獲得したり、中小企業においては1年目から社長賞を受賞したという報告も多方面からいただくようになりました。

一方、活躍するのが当たり前だと思っていたにも関わらず、1年目、2年目に思うような成果に恵まれないと「学生時代あれだけ学んだのに」と自信を無くしてしまう人もいます。そして、それまでの自分の努力や「しがく式」そのものを否定してしまうこともあるようです。しかし、入社してすぐに成果をあげた社員も、成果が出ずもがいている社員も、そのままの状態が続くわけではありません。

スポーツの世界でも新人王を獲得してから活躍し続ける選手もいますが、1年だけ輝いて終わってしまう選手も数多くいます。

受賞することは素晴らしいですが、駆け出しの人間が成功を手にする、少しの努力で仕事はうまくいくと勘違いしてしまいがちです。ビギナーズラックという言葉もあるように、新人の成果の背景には会社のプランニングや先輩の協力、タイミミングなど様々な要素が混在します。しかし、大半の新人は「自分が頑張ったから」と反省も分析もせずに終わっているように思います。

壁 にぶつかつたことがない、怖いもの知らずの新人は勢いがあるので、噛み合えば一気に成果が出ることもあるでしょう。しかし、ほとんどの仕事がそのまま勢いだけでいけるほど甘くありません。本気の反省を繰り返して、必ずやってくる壁を乗り越えることで、人間としての幅が広がります。30代、40代となったときに自分の経験を踏まえて部下を導ける優秀な管理職になつていきます。

キーワードは「成功より成長」です。極端な話をすると、入社1年目の社員に必要なのは成果ではありません。何より大切な

のは、一生懸命行動して反省を積み重ね、成長することです。「努力にスランプはない」という言葉もありますが、失敗も含めて全ての経験が将来の武器になります。早いうちから成果を出すと、出せなかった人が味わう苦しみや悲しみを経験できないという点では、管理職になったときに不利に働くということをわかつておきましょう。会社は社員の成長のために存在しているわけではないので、成果が出ていないことを当たり前にしてはいけません。しかし、一番問題なのは1年目から成果が出てしまいい勘違いしてしまうことです。運よく1年目から成果に恵まれたのであれば、自分だけの力ではないことを肝に銘じて、謙虚に反省と分析をしてほしいと思います。成果が出なかつた人は下を向くのではなく、前を向いて同期の成果を称えるくらい余裕を持ち、少しでも早く会社の戦力になれるように努力を続けてください。

新人賞に潜む落とし穴に惑わされることなく、成長に目を向けることができる人は素晴らしい人生を歩んでいけるでしょう。



(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長 室館 勲
MURODATE Isao

2003年株式会社キャリアコンサルティングを設立。ブータン王国立マネジメント大学など講演実績多数。全国社内木鶏経営者会 副会長。ミス・ワールド・ジャパン講師・審査員。著書に「夢を見て 夢を叶えて 夢になる」(致知出版社)、「まずは上司を勝たせなさい」(講談社)、「応援される人」になりなさい」(ワック)がある。